

東書教育賞は教育現場を 支援します

代表取締役社長

千石雅仁

会社を代表いたしまして、お祝いのご挨拶を申し上げます。

「第31回東書教育賞」を受賞された先生方、誠にありがとうございます。心よりお祝い申し上げます。

現在の学校教育を取り巻く環境を考えますと、グローバル化、情報化、世界標準の学力観、人口減少など、大きな変化の中にあります。まず、「第31回東書教育賞」の応募論文のタイトルから見えてくる学校現場の現在と課題について考察したいと思います。

応募論文のタイトルを、学力の3要素、すなわち、「知識・技能」「能力」「態度」の三つの項目で分類を試みました。応募総数231点のうち、「知識・技能」をタイトルに含むものが1点であったのに対し、「能力」の要素を構成する「思考力・表現力・判断力」を取り入れたタイトルのものは26点、また、「主体的」「主体性」等、「態度」の要素を構成するフレーズを含んだものも13点、「意欲的」や「積極的」、「アクティブ・ラーニング」等のフレーズを含むものに広げると26点と倍増します。

「知識・技能」をタイトルとして取り上げた論文が少なかったのは、現場の意識の中心が、いかに「基礎的な知識や技能を身につけさせるか」ということから、それを活用してより実際の「能力」をいかに養うか、また、児童・生徒の学びを支える、「主体性」等の「態度」をいかに育成するかということに重心を移しているからなのではないでしょうか。

その他、特徴的な傾向の一つに、「地域」と

いうフレーズを含むタイトルが12点あることが挙げられます。中には、保護者と地域を一体的に標題として取り込んでいるものもありますが、「保護者や親」と「地域」とは、空間的に重なり合いながらも、異なる概念だと捉えている傾向も見られます。おそらく、「地域」と「学校」との連携が、より重要な課題となっていることの反映であると考えますが、首長の権限強化など教育制度の変更に伴い、学校現場の視線が拡大せざるをえない状況を反映しているのかもしれない。

ほかには、特別支援に関するものが8点、ユニバーサルデザインに関するものが4点、ICTをタイトルに含むものが9点、アクティブ・ラーニングを含むものが9点、コミュニケーションを含むものが6点、キャリア教育を含むものが4点など、冒頭に申しあげた社会の大きな変化や教育課程の改訂を意識したものが目につきました。

最後に、これは必ずしも新教育課程を意識したとは言いきれないと思いますが、「学び合い」とか「深め合う」など、「～合い」「～合う」という言い回しを含む標題が18点ありました。これらの標題からは、「協働的な学習」に関して学校現場の意識が高まっていることがうかがえます。

さて学力問題ですが、世界的な状況として、主に経済格差が要因になっているのかわかりませんが、学力格差がますます顕著になっています。格差が拡大する中で、それぞれの国は、世界標準の学力観に基づき学力向上に努めています。

す。特に高等教育では、例えば米国におけるプラグマティズムに基づく産学共同、英国における哲学をベースとした人材育成などの取り組みを挙げることができます。

目を転じて、「世界に通用するような日本型学力観」について考えてみたいと思います。グローバル社会・情報化社会においては、「知識・技能」や「思考力・判断力・表現力」だけではなく、これまでのペーパーテストでは計測することが難しい、「非認知能力」としての自己認識・意欲・忍耐力・メタ認知・創造性・問題解決の力などを培うことが重要になってきます。その学力観の根底に、これまで日本人が大事にして

きた「自然への畏敬の念」や「生命の尊重」を置きたいと思います。その上で、「自ら考え、判断し、表現できる子どもの育成」、そして「異文化を理解し、優れた国際貢献力を持つ人材の育成」を重視すべきだと考えます。

最後になりましたが、公私ともご多忙な中、最終審査をご担当いただきました審査委員の先生方、一次審査をご担当いただきました東京教育研究所主任研究員の先生方はじめ多くの先生方に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

受賞された先生方の、今後ますますのご活躍を心よりお祈り申し上げます。